

翻 訳

## 人生の階段

—— 中欧における老化、世代間の関係、および小商品生産 ——

ヨーゼフ・エーマー  
ザルツブルク大学

(高木正道訳)

原典：Josef Ehmer, The “Life stairs”: Aging, generational relations, and small commodity production in Central Europe, in: T. K. Hareven (ed.), *Aging and generational relations over the life course: A historical and cross-cultural perspective*, 1996, pp. 53-74.

### 序論 (Introduction)

老化とライフコースのイメージは、世代間の関係において重要な役割を演じている。社会的な慣行を反映しながら他面ではそれを制御する手段として、老化とライフコースのイメージは、若者と老人のあいだでの権力と資源と介護の配分の仕方を規制したり、正当化したり、あるいはその正当性に疑問を抱かせたりする。だから、老化とライフコースのイメージを研究することによって、世代間の文化的な次元を洞察することが可能になるであろう。

不幸なことに、老年について過去の人々が抱いていた考えは、主として哲学や神学の原典のなかで述べられており、それは普通の人々の経験や実際とはかけ離れているように思われる。そのような隔たりが生じないように、この論文は、洗練された理論ではなく単純な絵で表されたイメージ、すなわち人生の階段を扱う。その他の図像表現に比べて、このモチーフは歴史上異常ともいえる成功をおさめた。少なくとも3世紀にわたって、およそ1600年から1900年まで、それは、西洋世界のいたるところで、特に中欧において、老化とライフコースについての最も普及した世間一般のイメージであった。

第1節では、人生の階段の創造と普及と衰退について述べる。第2節では、人生の階段のイメー

ジと社会構造との関係について論じる。もし両者のあいだになにか関係があるとすれば、それは複雑で一義的なものではない。しかしながら、人生の階段の長期的普及とそれに特有の時間的・空間的背景は、気まぐれでも偶然でもないように思われる。むしろ人生の階段のイメージは、自己の社会的地位が家族における世代間での富と財産権の移転に左右された人々の目標と期待と経験に、きわめてよく適合するものであったように思われる。私の仮説は、人生の階段に描かれたライフサイクルにおける老年と、19世紀末まで中欧で優位を占めていた特殊な社会的関係である「家族的生産様式」ないし「小商品生産」とのあいだには、ある関係があった、というものである。

したがって、この論文の目的は2重である。すなわち、人生の階段を論じることによって、小商品生産内部での世代間の関係への洞察を与え、小商品生産内部での世代間の関係を論じることによって、人生の階段への洞察を与えたい。この生産様式の歴史は、老化とライフコースについてのこの特殊なイメージが世間一般に普及し、長期にわたって存続し、そして衰退していった事情を説明する助けとなるはずである。

### 昇降の2つの部分から成る階段——老化とライフコースの「原型」イメージ

#### (The Dual Stairs: An “Archetypical” Images of Aging and the Life Course)

1540年、アウクスブルクのヨルク・ブロイ息子(Jörg Breu der Jüngere)とアムステルダムのコルネリス・アントニス(Cornelis Anthonisz)は、同時に、新しいモチーフによって、老化とライフコースの図像表現の多様性をいっそう豊かなものにした。すなわち、かれらの木版画は、昇降の2つの部分から成る階段(dual stairs, “Lebenstreppe”)の形で人のライフコースを表した。ライフコースの前半は上昇で、40歳でピークに達する。“vetich Jaer wel ghedaen”(40歳で裕福になる)は、アントニスの木版画に見える低地ドイツ語の表現である。50歳は、頂点であると同時にライフコースの転換点でもある。それは、方向の逆転が始まる短な静止である——“Viiftich Jaer stilgestaen”(50歳は静止状態〔つまり、上昇も下降もしない〕)。ライフコースの後半は下降で、死をもって終わる。階段のアーチを通して最後の審判が見えるが、衰退と退化としての老化の強烈な表現は、それによって和らげられるものではない。永遠の生への希望は後景に退いている(図1)<sup>1)</sup>。

ヨルク・ブロイとコルネリス・アントニスの着想のもとになったパラダイムは、1540年頃の中欧では新しいものではなかった。古代の哲学者たちによって展開されていた人生の段階論は、少なくとも知識階級のあいだでは知られていた——例えば、ライフコースを一定数の時期に分けること(これはソロンに由来する)、あるいは、ライフコースの頂点を中年期に見るアリストテレスの「中

年楽観主義 (mid-life optimism)」(Rosenmayr, 1979, p. 285; Monois, 1987, p. 234)。また、人生を神聖な宇宙の一部と解釈して、ライフコースを日出から日没までの太陽の運行や四季の移り変わりと比較した中世の著述家たちも、知られていた (Burrow, 1986, pp. 55f.)。トマス・アクィナスは、ライフコースを上昇と下降から成るとみなし、中年期に完成に最も近づくという考えを抱いていた (Minois, 1987, pp. 93ff.; Beauvoir, 1977, p. 94)。ダンテは、人生を「35歳に最高の中点をもつシンメトリカルなアーチ」として描いた (Burrow, 1986, p. 35; Sears, 1990, pp. 103 ff.)。

このような人生のモデルは、16 世紀初めのドイツ語圏で謝肉祭劇の一部となった。バーゼルで 1515 年に初めて上演されたパンフィリウス・ゲーゲンバッハ (Pamphilus Gegenbach) の演劇「世界の 10 の年齢 (The X Ages of the World)」は、50 歳までの上昇とそれ以後の下降を 10 の役割を配したドラマに仕立てたが、各役割は年齢段階を表していた (Joerißen, n.d.b, Winter Jones, 1853, p. 179)。こうして、上昇と下降のモチーフは、知識階級の範囲をはるかに超えて広く普及し、世間一般に知れ渡るようになった。

中世末期にはライフコースの図像表現もまた発展したが、そうした動きはおそらく 12 世紀に始まっていた。最初は、人の一生を円、輪、樹で表すのが支配的なモチーフであった (Sears, 1990, pp. 140ff.)。よく知られた運命の輪の変形であった一生の輪は、ライフコースを上昇と下降から成ると見る観念をある程度まで表現していた——「若者たちは昇ってゆき、全盛期の男は頂点にあり、全盛期を過ぎた者たちは、しばしば厳めしく足早に降りていく」(Sears, 1990, p. 145)。他方で、このモチーフでは、すべての年齢段階は女神が座している輪の精神的中心から同じ距離にあった。

15 世紀と 16 世紀初めに、年齢段階の配置において直線的な配列が重要性を増した。初期の図像ではさまざまな年齢配列が共存していた——例えば、4 年齢体系もあれば、7 年齢、9 年齢、あるいは 11 年齢体系もあった——が、今や 10 年齢体系が優勢になった。個々の年齢段階は、主として、個々の人物の姿勢、身振り、衣装、アクセサリーによって特徴づけられた。それに加えて、個々の年齢段階の肉体的・精神的能力と社会的地位を強調するために、動物のシンボルが用いられた (図 1 を参照)<sup>2)</sup>。

10 years a child	10 歳は子ども
20 years a youth	20 歳は若者
30 years a man	30 歳は一人前の男
40 years well done	40 歳は裕福である
50 years stand still	50 歳は静止状態
60 years old age begins	60 歳で老年が始まる

70 years old man	70 歳は老人
80 years wisdom gone	80 歳でばける
90 years the children's ridicule	90 歳は子どもたちの笑いもの
100 years God have mercy <sup>(9)</sup>	100 歳で神に召される

このような形で、年齢段階の 10 分割は、さまざまなイラスト — 銅版画や、挿絵などの木版画 — に浸透していった (Dal, 1980)。16 世紀には、年齢段階のモチーフが、主にボヘミア、モラヴィア、オーストリアで、都市の壁画にも現れた。下オーストリアのレッツ (Retz) 市の著名な市民の家のファサードに、年齢段階の文学や絵画での表現にくり返し現れるモチーフのひとつ — 「若者による年寄りの嘲笑」(「90 歳は子どもたちの笑いもの」) — のとりわけ入念な表現が見られる (図 2 を参照)。

ライフコースを直線的に表現したきわめて印象的な事例のひとつが、アナベルク (Annaberg) の聖アネン教会 (St. Annen-Kirche) の浅浮き彫りに見出される。それは、1520～1522 年にフランツ・マイトブルク (Franz Maidburg) によって彫られた。1497 年の銀鉱発見以後に建設されたアナベルク市は、わずかの年月で、ザクセンのエルツ山脈 (Erzgebirge) の銀鉱山業の中心になった。1499～1525 年に建てられた同市の教会は、ドイツ初期資本主義のすばらしい遺産のひとつである。年齢段階の図像は、16 世紀のあいだに、教会の装飾と都市の壁画を通じて大衆を観衆とするまでになった。

こういった証拠が示唆しているように、中欧では近代の初めに、年齢段階についての広く行き渡った見方が、画像と概念が密接に結びついた規範に表現された。ヨルク・プロイトとコルネリス・アントニスの木版画は、こうした見方とイメージを借用したのである。さらにかれらは、昇降の 2 つの部分から成る階段のイメージでもって視覚モデルを創り、上昇と下降という哲学的・文学的概念を、当時広く行き渡っていた年齢段階の図像表現と結びつけたのである。昇降の 2 つの部分から成る階段のヒエラルヒー的構造は、若者と老人にたいする中年の特権を強調するのに最適であった。同様に、ピラミッドのモチーフは、社会の身分秩序 — 「身分の階段 (Ständetreppe)」 — のヒエラルヒーを象徴していた。「人生の階段」のモチーフは、ひとつの「原型」となったのである (Beauvoir, 1977, p. 137)。

研究の現段階からみると、昇降の 2 つの部分から成る階段のモチーフは、16 世紀にはほとんど普及しなかったようである (Schenda, n.d.)。1550 年もしくは 1560 年頃に、このモチーフは、モデナのクリストファノ・ベルテッリ (Christofano Bertelli) の銅版画に現れたが、この時期についてはそれ以上の事例は今のところ発見されていない。17 世紀になってやっと、このモチーフは、ドイツ語圏とその他の中欧や西欧の各地へ急速に広がった。オランダ、南ドイツ、北イタリア、フ

ランスから、多数の事例が見つっている——「世界の大きな階段 (Le Grande Escalier du Monde)」(パリ、1630 年)、「人の年齢 (Les Aages des Hommes)」(パリ、1680 年)、「人の年齢と生涯 (The Age and Life of Man)」(ロンドン、17 世紀)、「10 の年齢段階 (Das Zehenjährige Alter)」(アウクスブルク、1660 年)(図 3 を参照)、スウェーデンの「年齢階段 (Alderstrappa)」(1680 年頃)、その他いくつか (Brückner, 1969, p. 81; Fehrman, 1952, p. 289; Adhemar, 1968, plate 7; Halliwell, 1856, pp. 154f.)。われわれは、製造技術と潜在的な購入者に関して、多様化が進んだことを知っている。つまり、人生の階段はさまざまなかたちで作成された——油絵、豪華に仕上げられた大きな銅版画、小さめの質素な木版画。またそれは、カレンダーに描かれたり、葬儀の式辞に付けられたりした (Imhof, 1884, p. 144)。そして、16 世紀には男の人生の階段と女の人生の階段が別々に描かれていたけれども、一緒に同じ人生の階段を歩む夫婦を描いたものがますます増えていく。この時まで、昇降の 2 つの部分から成る階段のイメージは周知のシンボルになった。イギリスの風刺詩人トマス・バンクロフト (Thomas Bancroft) は、「人の段階的变化 (Man's Gradation)」(1639 年)<sup>4)</sup> という詩のなかで、ライフコースの視覚モデルに言及した。若い恋人と裕福な年配の男のいずれを選ぶべきか決めかねている少女を描いたヤン・ステーン (Jan Steen) の絵のひとつでは、その場面の背景に人生の階段の版画が見える (Bialostocki, 1957, p. 544)。

18 世紀には、人生の階段の「ブルジョワ化」(embourgeoisement) がさらに進んだ。ますます拡大していく観衆がターゲットになった。そして、ニュルンベルクのヴォルフ (Wolff) やバッサノ・デル・グラッパ (Bassano del Grappa) のレモンディーニ (Remondini) のような、大きな出版印刷会社は、新しい製造技術を用いた。登場人物は、ターゲットである消費者集団の地域と社会に特有の衣装を着せられ、動物のシンボルは消えた。死はバロック時代の人生の階段にはまだ認められたが、その死も絵から消え失せた。砂時計のような時間と人生の経過を象徴するその他のものも、ますます稀になった。家庭を描いたものであることが歴然となり、今や階段のアーチを通して見えるのは、最後の審判にとって代わった中産階級の居間である。フランスでは、革命の時までに伝統的なシンボルは消滅してしまっていた<sup>5)</sup>。「ライフコースは今やブルジョワの経歴の性格を帯びるのである」(Heinisch, 1991, p. 42) (図 4 を参照)。

19 世紀には、人生の階段の人気は頂点に達した。それは、新しい大量生産イラストのお気に入りモチーフであり、リトグラフや版画のかたちで何百万も売れた。それらを販売した最も重要なヨーロッパの印刷会社としては、ミラノのピエトロ・バレッリ (Pietro Barelli)、ニュルンベルクのフリードリヒ・カンペ (Friedrich Campe)、エピナル／ヴォージュ (Epinal/Voges) のイマジェリ・ペレラン (Imagerie Pellerin) がある<sup>6)</sup>。「その後すぐに、このパターンは大西洋を渡った」(Chew, 1948, p. 165)。それを作成したのは、ニューヨークのクーリエ・アンド・イーヴズ

(Currier & Ives) やジェームズ・ベイリ (James Baillie)、マサチューセッツからインディアナポリスまでの印刷業者、そしてペンシルヴァニアのカーリスル (Carlisle) のドイツの印刷会社モザー・アンド・ペレス (Moser & Perres) であった<sup>7)</sup>。人生の階段のモチーフは、西洋世界のほとんどいたるところで、タイル、ビールのジョッキ、タバコの箱、カレンダーに見られる。人生の階段を印刷したものが、居間、宿屋、仕事場に掛けられている。ヤーコプ・グリムの「老年者へのスピーチ (address to old age)」(1863 年) には、彼の両親の居間にあった人生の階段の絵とその印象——「私の記憶に刻み込まれた消すことのできない」イメージ——が述べられている (Grimm, 1863, p. 43)。19 世紀末のドイツの著述家たちは、バイエルンの農家や地方の定期市で人生の階段のモチーフを目にした (Boll, 1913, p. 92ff.)。

第 1 次世界大戦の頃には、人生の階段の絵にたいする大きな需要は減少した。人生の階段の絵は、出版社のカタログから消えはじめた。第 2 次世界大戦の終わり頃には、それはヨーロッパの経済的後進地域でしか見られなくなった (Lebenstreppe, n.d., pp. 160f.)。

人生の階段の普及と受容の研究は、始まったばかりである。しかし、これが異常な成功をおさめたモチーフであったことは、疑いえない。16 世紀に創りだされたそれは、17 世紀と 19 世紀のあいだに最も広く受け入れられたライフコースと老化のイメージであった (Cole & Winkler, 1988, p. 146)。年齢段階の言葉による説明 (40 歳は裕福である、50 歳は静止状態……90 歳は子どもたちの笑いもの) は、ドイツ語圏では絵と同様に長く続いた。年齢段階の直線的な表現のこうした定式化は、早くもアントニスの 1540 年の人生の階段に現れ、19 世紀半ばにいたるまで世間一般に流布したイラストの永続的な構成要素であり続けた。

一般に、広く行き渡ったパラダイムと図像表現は、強い持続性をもっている。人生の階段のようなイメージは、おそらく、「長期の持続」の領域に、フェルナン・ブローデルの言い回しを使えば、長期間の「牢獄」であるあの思想構造に属する (Braudel, 1958, p. 750)。それにしても、ただひとつの図像表現のモチーフが、老化に関する哲学的・宗教的・科学的・通俗的な言説における、老化についての種々の競合する見方を退けて、3 世紀もの長いあいだ広く普及したのは、注目に値することである。歴史上のどの社会をとってみても、ライフコースと老化についてのいくつかの見方が同時に存在していた。つまり、老化を衰退と退化とみる悲観的な解釈と、上昇と完成とみる楽観的な解釈の両方が、常に並存していた。人生の階段のイメージが登場し普及していったけれども、こうした多様な解釈もまた存在していた。

老化の悲観的な解釈は、人文主義者による「家父の権力 (patria potestas)」の批判においてだけでなく、演劇や文学における人生の階段を通じて表現された。これとは対照的に、ルターやカルヴァンのような宗教改革者たちは、「神と主と父 (God, Lord and Father)」の同一性を強調し、老年者の権威を強化した。この楽観的な解釈が広められたのはとりわけ教理問答書の教えを通じて

であり、この点ではプロテスタントとカトリックの対抗宗教改革とのあいだにほとんど差がなかった。16世紀から18世紀に広く普及した「家父の指南書 (Hausvaterliteratur)」のなかにも、父と老年者の権威の確認が見出される (Borscheid, 1987, p. 113; Thomas, 1976)。

さらに、老化とライフコースについてのさまざまなイメージには、一定の「景気循環 (business cycles)」があるように見える。ほとんどすべての老化の文化史によれば、16世紀は老化をきわめて否定的に捉えたのにたいして、18世紀、特に啓蒙主義の時期は、老年を非常に高く評価したが、19世紀には若者と老人差別 (ageism) の社会への移行が始まった<sup>8)</sup>。このような時代区分が正しいか否かは、ここでのわれわれの関心ではない。特定の時代には特定の老化の解釈が優勢であり、支配的な老化のイメージは歴史的に変化したというのは、そのとおりであると思われる。

これらのことすべてを考慮すれば、人生の階段が長期にわたって広く普及した事実は、ますますもって注目に値するものとなる。人生の階段が具現する観念は、対立するさまざまな言説と優勢な見方の長期的な循環を凌駕した。人生の階段のイメージに込められたメッセージは、間違いようのないものである——50歳以降の人生は衰退と退化であり、これを受け入れることのできない者は子どもたちのジョークの標的になる。

### 老年のイメージの意味 (The Meaning of Images of Old Age)

何がこのモデルを長期にわたってかくも魅力的なものにしてきたのであろうか。このモデルが16世紀半ばから徐々に広がっていったのは何故であろうか。そして、それが第1次世界大戦の頃に突如として消えてしまったのは何故であろうか。これらの疑問に答えるためには、まず老年のイメージは何を意味しうるかを論じる必要がある。

確かにわれわれは、人生の階段の画一性と厳格な配置を、以前の数世紀における人生の人口面と社会面での不確実性を文化的に克服するための試みとみなすことができる。イムホフとアリエスが示唆したように、それは安定を求める努力の一部を成していた (Ariès, 1978, p. 81; Imhof, 1984, p. 136)。

われわれは、こう考えることも可能かもしれない。つまり、16世紀から17世紀への変わり目に人生の諸段階が人々の心をとらえたのは、この時期に死に関することへの関心、とりわけ良い死に方への関心が強まったからである、と。15世紀の後半には、書物や絵画が「往生術 (artes moriendi)」を教えはじめた (Imhof, 1991)。髑髏や骨、あるいは弓矢で武装した骸骨によって象徴される死は、人生の諸段階を描いた図像では時には各段階に存在している。ここでは死と人生の諸段階のテーマは一体化している (Ariès, 1978, p. 81)。しかし、人生の階段の人気は、死に関

することへの公衆の関心が消えてからもずっと後まで続いたのである。

コール (Cole) とヴィンクラー (Winkler) は、心性 (mentalité) の歴史に社会構造的解釈をつけ加えた。かれらは、上り階段と降り階段の形状に、中産階級の成功をめざす闘争と社会的衰退への恐れを見ている。かれらにとって、人生の階段は「ブルジョワに特有のライフコースのイメージ」を表している (1988, p. 46)。この後者の解釈は、人生の階段を時間的・空間的にもっと正確に位置づけることに貢献した。実際、それはブルジョワ社会の勃興にともなって生じた老化のイメージである。しかし、社会的な上昇と下降のテーマが、非常に長いあいだライフコースと老化の特定の解釈と結びつくのは何故であろうか。そのようなイメージと社会構造は、どのような関係にあるのだろうか。

人生の階段の私の「読み方 (reading)」は、老化のイメージと社会的現実のあいだには複雑な関係があるという仮定から出発する<sup>9)</sup>。老化と人生のさまざまな解釈は、恣意的でもなければ、好き勝手に選ばれたのでもない。しかし、それらは社会的実践の単純な反映でもない。それらは、社会的な経験を圧縮してつくられた抽象的なステレオタイプである。こうして、老化とライフコースのイメージは社会的な規範となり、そうなるとうちはこの規範が実践に影響を与え、期待と行動を規制するのである。

このことを背景として、われわれは、老化のイメージの社会的機能の考察を開始できる。ゲルト・ゲッケンヤン (Gerd Göckenjan) は、老化のイメージにはいくつかの意図が潜んでいると考えた。すなわち、老化のイメージは、ライフコースの設計図を提示し、「目標と目的、欲望と空想の合流地点」となる。老化のイメージは、各自の社会的地位を指定し、社会問題を映しだすスクリーンの役割を果たす。だが老化のイメージの中心観念は、とりわけ、世代間の関係を規制することにある。つまり、老化のイメージは、世代間での期待の地平——社会的に受容可能な世代間での慣行——を形成し、家族周期における世代間の関係を規制するのである (Göckenjan, 1989)。

こうした観点からすれば、人生の階段は、上昇してくる若い世代から年老いた世代へのメッセージを具現している——あなた方はすでに絶頂期を過ぎ、あなた方の肉体と精神は衰えるばかりだ。引退して場所を空けてもらいたい。さもなくば、あなた方は子どもたちの笑いものになるでしょう。人生の階段は、老年者にとって代わろうとする若者たちの願いを正当化すると同時に、老年者がそれを受け入れて退くよう促しているのである。

こうして、われわれは、人生の階段のモチーフに含まれた、社会的な上昇・下降と個人のライフコースと家族周期との結びつきの説明を試みることができる。われわれは、それを、社会的な上昇・下降と社会的地位が家族における世代間での財産と富の移転に依存するさまざまな社会階層の実践に関係づけることができる。そのような社会的関係が優勢だったあの長期間にわたって、実際に、人生の階段のモチーフは異常なほど広範に受け入れられた。中欧では、そうした時期が、西洋世界



の他の地域よりも長く続いた。

### 財産の移転と世代間の関係 (Transfer of Property and Generational Relations)

家族の構造、発展周期、および老化の歴史について、過去 20 年間に非常に多くの研究がなされた。それらの研究によって提出された証拠によれば、近世の中欧では、世代間の関係は財産と富の移転によって大きな影響を受けた。財産のある農民、手工業者、そして都市の中産階級においては、特にそうであった。

南西ドイツの農村と小都市における世代間の関係については、例えば、17～19 世紀のネッカーハウゼン (Neckarhausen) に関するデーヴィッド・サビーンの研究において、詳しく研究されている (Sabeian, 1990)。近世の南西ドイツは、特に柔軟で流動的な社会構造によって特徴づけられた。南西ドイツは、小規模農家によって営まれる集約的な市場向け農業生産と手工業が混在する地域で、そこでは土地市場が発達し、すべての相続人に質量ともに同等の財産分与を保証する分割相続の制度が広まっていた。

このような条件のもとで、両親の資産の次世代への移転は、継続的な「漸次的」過程であった (Sabeian, 1990, p. 248)。結婚に際して、花婿と花嫁はかれらの将来の相続財産の最初の部分を受けとった。どのような形態でどれだけ移転されるかは、両親によって決められた。しばしば結婚のときの分与は、貸与にとどまるか、用益権だけが移転されるにすぎなかった。正式な財産譲渡が取り消されることさえあった。のちになって、別の財産が分与されることもあった。これらすべては、とりわけ、両親の健康状態に依存していた。両親が肉体の衰えを感じた場合には、子どもたちの労働および援助と引き換えに、財産を譲渡した。両親が死ぬ前に完全な富の譲渡 (*Übergabe*) が行われることは、この地域では稀にしかなかった。老年世代は、自分の財産と経済的独立にたいする支配権をできるだけ長いあいだ手放すまいとした。財産の移転における最後の決定的な手続は、かれらの死まで行われなかった。「若い世代の財産へのアクセスは、絶えざる交渉のもとに置かれていた」 (Sabeian, 1990, p. 322)。

中規模と大規模の農家が優勢だった中欧の地域では、土地市場も発達しておらず、単独相続が規範であった。そこでは近世に、異なった財産移転のモデル、すなわち、生前譲渡 (*inter vivos inheritance*) が広まった。農村社会では、隠居 (*Ausgedinge*) の制度とともに、契約によって決められ法的に規制された、生きている当事者間での財産移転の形態が発展した。隠居制は、相続人たちが両親の死を待たずに農家を引き継ぐことを可能にし、隠居したあとの両親の生計を保証した (Gaunt, 1983, p. 250)。

こうしたやり方での財産移転の存在を示す徴候は、ヨーロッパの各地で早くも 13 世紀に見られ

る。しかし、隠居の普及に関しては、ほとんどなにも知られていない。それは、15 世紀末頃のデンマークとスウェーデンで、しばしば出現したようである。ドイツ語圏のいくつかの地域（例えば、上オーストリア、Grüll, 1969, p. 92 を参照）においては、16 世紀に隠居契約の数が多くなるけれども、他の地域では隠居制はこの時期にはまだ知られていない。現在の研究状況から判断すれば、隠居制は一般に 17 世紀のヨーロッパで見出され、19 世紀にその頂点に達したようである（Gaunt, 1983; Taeger, 1990）。

しかし、隠居制の「普及」とはどのようなことを意味するのであろうか。それは、世代間でのこの種の財産移転が利用可能なものとして一般に知られていたことを意味するにすぎない。ドイツ語圏には、この種の財産移転の概念を表す言葉が種々の方言に見られる — *Ausgedinge*, *Altenteil*, *Leibzucht* 等々。隠居制の存在は、隠居世代のためのスペースを備えた農家の建物のレイアウトからも知られる。隠居のためのスペースは、裕福な農家の母屋に隣接した小さな家や、貧しい農家の別棟であったり、あるいはまた小さな部屋にすぎないこともあった。

隠居制の「普及」とは、この生前の財産移転が唯一の形態ないし支配的な形態として行われたことを決して意味するものではない。隠居制の可能性は、さまざまな外的要因 — 生死にかかわる不確実性、農家の生産力 — に左右された。大規模な農家だけが、2 組の家族を扶養できた。とりわけ、隠居制の可能性は、財産を支配する老年世代の意思と頑固さと戦略に依存した。

17 世紀から 19 世紀のオーストリアの史料を調査したトーマス・ヘルドの数量的な研究によれば、隠居制はきわめてわずかしき見出されない。隠居していたのは、平均して、51~70 歳の老人のおよそ 8 パーセントであった。11 パーセントの世帯が隠居人を含んでいた（Held, 1982）。このことは、大多数の老人が死ぬまで家父や主婦の役割を果たしたことを意味するわけではない。多くの人はこの地位に達することがなかったし、独身の親族あるいは同居人として農家に住んでいた。この時期のオーストリアのいくつかの農村では、世帯主とその配偶者が 60 歳以上である世帯の割合は、めったに 50 パーセントを超えることがなかった（Ehmer, 1982, p. 85）。しかし、この地位に達していたものは、めったにそれを手放さなかった。

したがって、隠居制が広く行われていたところでも、家族内での財産の移転が自動的に起こるわけではなく、世代間の交渉のもとに置かれていたのである。これは、年配の農民がそもそも隠居するかどうかだけでなく、かれらの隠居が農家に課す負担の程度にも関連している。隠居契約では、隠居する所有者はしばしば莫大な収入の保証を受け、それによって次世代に重荷を負わせ、ときにはかれらを破滅させることもあった。確かに、契約で合意された金銭と現物での年金は、実際にはその完全履行を要求されることのない上限を意味したが、隠居人の権力を強める手段にもなりえた。ハーマン・レーベルが研究した 17 世紀上オーストリアの農村では、農家の収入の 4 分の 1 から半分が隠居人のものとなった（Rebel, 1978）。かれらのなかには、地元の金貸しとして活動している

者もいた。そのような場合には、「隠居制は、老人たちを引退させてかれらのわずかの福祉を整えるための社会的便法ではなく、むしろ、世帯主が家庭と家族の範囲をこえて新たな経済的・社会的活動を探すためのオプションであった」(Rebel, 1983, p. 173)。言い換えれば、これらの活動は、隠居契約で保証された分与のほかに、付加的な経済力を隠居人に与えたのである。

また、老年世代は、重荷や義務や責任や負債から自由になるために、あるいはレジャーを楽しむために、農場経営を放棄する必要があったのかもしれない<sup>90</sup>。裕福な農民は、しばしば、家族内での継承の継続を保証するタイムリーな隠居を戦略として用いた。例えば、ヘッセンのシュヴァルム(Schwalm)のフェルテス農場(Vältes-farm)は、1776年から1970年まで、ヨハネス・フース家(a Johannes Hooss)のものであった。代々のヨハネス・フースは、次世代への農場の移転を注意深く計画した。かれらの平均的な隠居年齢は60歳であった。そのあとかれらは——平均して——隠居人として農場でさらに18年生きた(Imhof, 1984, p. 142)。

中欧のこれらすべての農村地域では、家族における財産の移転は、種々の相違する利害が集まる焦点となった。財産の移転は、世代間の絶えざる複雑な交渉のプロセスであった。単純明快に図式化されたライフコースのモデルが必要となったのは、このプロセスの複雑さと継続性の故であった。人生の階段のイメージは、こうした絶えざる交渉の当事者たちのなかにその市場を見出した、と言えそうである。

### 夫婦がともに歩む人生の階段 (The Partnership Conception of the Life Stairs)

すでに述べたように、16世紀と17世紀初めには、人生の階段の圧倒的に多いタイプは男女別に描かれたものであった。人生の階段のモチーフが普及するにつれて、夫婦が一緒に描かれる頻度が増していった。

この変化は、財産移転の観点からしてまったく適切なものである。オーストリアの村落の研究が明らかにしたところによれば、財産移転は高い確率で再婚と結びついて起こっている。調査された事例の30~40パーセントにおいて、夫が死んだあと寡婦が農場の所有権を継承した。これらの寡婦の多くは再婚しなかったのであるが、その場合でも、彼女たちによる遺産の継承は将来の相続人にとって脅威となりえた。「確かに、再婚した寡婦たちは推定相続人との利害衝突に直面したであろう。後者は、よくても相続財産がかなりのあいだ手に入らないことを考慮せねばならず、悪くして女性が2度目(あるいは3度目)の結婚で子どもを生むようなことになれば、これらの子どものから相続人が選ばれて財産を横取りされるかもしれないことも考慮せねばならなかった」(Sider & Mitterauer, 1983, p. 313)。19世紀には、再婚の減少が隠居の増加とパラレルに進んだ。さら

に、デンマークのある事例研究が示しているように、18 世紀後期に始まった現象であるが、農民たちは男女ともに一定年齢以後はもう再婚しなくなった (Johansen, 1987, p. 297)。約 60 歳を過ぎると、配偶者の一方が死んだあとは、農場の移転が完全に行われた。隠居が自動的な性格を帯びたのは、このような場合においてだけであった。

こうした戦略は、隠居制が普及していないところでもある役割を果たした。1700～1870 年のネカーハウゼンでは、生前譲渡が行われたのは相続財産全体の 14 パーセントにすぎなかった。それらはほとんどすべて、一方の配偶者が死亡し、残された配偶者が隠居した場合に起こった。サビーンが見出した夫婦隠居の事例はただひとつであった (Sabeian, 1990, p. 341)。一般に寡婦と男鰥は、できるだけ長いあいだ財産にたいする支配権を保持しようとするか、そうでない場合には再婚しようとした。2 度目あるいは 3 度目の結婚は、財産相続資格者の数を増やし、最初の結婚で生まれた子どもたちの分与財産を減少させた。夫婦がともに歩む人生の階段は、残された配偶者が隠居するよう促したので、世代間での交渉においてひとつの論拠となったであろう。

### 人間の寿命と人生の階段に見る生涯

#### (Human Life Span and the Chronology of the Life Stairs)

人生の階段の表現では、人間の寿命は、50 歳を人生の頂点として、100 歳に及ぶとされている。勿論、これは近世における実際の人口現象を反映するものではない。すでに見たように、それは、現実ではなく、哲学と図像の伝統と 10 進法のシンメトリーに従っている。実際、生涯を 10 年きざみで 10 段階に分けるのは、特に後半部の後半の解釈について問題をひき起こす。「10 の年齢段階は要するに多すぎる」(Burrow, 1986, p. 73)。しかし、100 歳という長さも、50 歳の転換点も、当時の人々の経験や願いとまったく矛盾するわけではない。

平均寿命は低かったけれども、老年まで生き延びるチャンスも勿論あった。イギリスでよく知られたシリーズである「歴史名士録 (Who is Who in History)」を用いた S. R. スミスの調査によれば、16 世紀の巻に挙げられた人々のうち約 3 分の 1 が、また 18 世紀にはほとんど半分が、70 歳もしくは 70 歳を超えて生きた。宗教改革期のヘッセンの牧師の死亡年齢も、まったく似たような数字を示している (Borscheid, 1987, p. 46)。すべての年寄りが実際に正確な出生日を憶えていた、と考えることはできないであろう。1681 年 3 月に哲学者のジョン・ロックは、オックスフォードのアリス・ジョージ夫人——「108 歳だといわれている女性」——を訪ねた。隣の部屋に住んでいる彼女の息子は、77 歳だといわれていた。これらの数字はどちらも誇張されているであろう。しかし、人間のライフコースが官僚行政によって完全に捕捉される以前には、老齡者はおそらく自分

や親族や隣人を実際よりも年寄りだと見ていた。かれらにとって 100 歳の寿命のイメージは、現代の注意深く数える歴史人口学者にとってと同じほど途方もないことではなかったであろう。

われわれにとってもっと興味深いのは、人生の階段の転換点である。さまざまな研究が提供している証拠によれば、50歳 は実際にもライフコースの決定的な時点でもあった。

分割相続の制度のゆえに世代間の財産の移転が漸次的・継続的な仕方で行われた南西ドイツでは、個々人の財産総額はライフコースにわたってかなり変動した。例えば、18 世紀と 19 世紀のネカーハウゼンでは、「個人が保有する財産の平均総額は……徐々に増加し、およそ 45～54 歳でピークに達した……30 歳までは、富に恵まれることはほとんどなかった。30～44 歳の時期に、人々は結婚持参金や相続財産を手に入れたり、資産を購入したりし、この過程は 45 歳かそこらの年齢で完了した……そのあと、おそらく富の移転が始まると、資産を維持する段階に入った」(Sabeau, 1990, pp. 257ff)。

隣接するエスリンゲン (Esslingen) の農民やブドウ栽培者の個別の家族史は、同じ傾向を示している (Schraut, 1989a)。19 世紀には、若い夫婦は老夫婦に依存し、頻繁に両親と一緒に暮らした。一連の財産の移転はかれらを完全に独立させ、およそ 40 歳で自分の家をもてるようになった。50 歳になるとさらに財産が蓄積され、かれらのなかには税を納める豊かな農民グループに入る者も現れた。不動産の最大総額は 50～60 歳で見られた (Schraut, 1989, p. 196)。しかし、ライフコースのその段階に達すると、かれら自身の子どもたちが成長し、結婚しはじめるようになる。こうして世代間での財産移転の新たな循環が始まり、年配世代の財産は減少した。

東ガリキアにおけるウクライナとポーランドの農民家族のライフサイクルは、似たようなパターンを示している。

農民の息子が成人したとき、かれは両親から 2～3 エーカーの土地を与えられ、彼の妻の結婚持参財産が 1～2 エーカー加わる。辛い労働と節約と出稼ぎによって、彼はさらに多くの土地をなんとか購入した。そして彼は、両親と親戚が死ぬとさらに多くの土地を相続する。彼の保有地は彼が 50 歳の頃に最大規模に達する。今や彼の子どもたちは成長し、彼は自分が死ぬ前にかれらに数エーカーの土地を「分与」せざるをえなくなった。彼はその生涯を小規模保有者として開始し、少しのあいだ中規模の所有者になったが、小規模保有者として死んだ。(Kieniewicz, 1969, p. 212; Rudolph, 1986, p. 32 から引用)

単独相続の地域では、財産の移転はあまり漸次的ではなかった。ここでは、隠居が、ライフコースと家族周期における大きな転換点であった。18 世紀と 19 世紀に関する多数の研究が、隠居したときの年齢を証明している。ある上オーストリアの教区 (1813～173 年) では、隠居した年齢は 37 歳から 80 歳までに及んでいたが、50 歳から 65 歳に集中していた (Krabicka, 1980)。1900 年頃には、隠居時の平均年齢は、ボヘミアで 46 歳、モラヴィアで 52 歳、上バイエルンで 45～50 歳で

あった。似たようなデータが、デーヴィッド・ゴントによって、18 世紀と 19 世紀のフィンランドとスウェーデンについて提出されている。18 世紀末と 19 世紀のオーストリアの農民に関する一連の個別家族史は、隠居時の年齢が 50 歳、51 歳、55 歳であったことを示している。もっと遅い時点での隠居は、成人した相続人が身近にいない場合にしか見出されなかった (Sieder & Mitterauer, 1983)。

ノルウェーにおける「所有者のライフサイクル」の分析も、似たような結果を提供している。1664～1930 年のノルウェーのセンサスから抽出された年齢集団ごとの豊かさのインデックスは、考察対象となった全期間を通じて驚くほど安定したパターンを示している — 「収入、富と所有地、土地占有ないし土地所有の統計は、一般に放物線状のパターンを示している。豊かさは 20 歳から上昇しておよそ 50 歳でピークを迎え、そのあとに、年老いた人々においては少なくともいくらか下降する」 (Soltow, 1990, pp. 445f)。

近世の都市社会における世代の関係と財産の移転は、これまでのところあまり研究されていない。しかし、われわれが手にしているわずかな証拠は、農村地域と似たような傾向を示している。シュヴァーベン・ネルトリンゲン (Nördlingen) 市の市民の大抵の男性世帯主は、結婚してから 50～55 歳までの時期に、かれらの財産のかなりの増加を経験した (Friedrichs, 1979, p. 326)。1500 年頃のヘクスター (Höxter) 市 — 下ザクセンの小都市 — に関する研究は、50 歳以後に富が移転することをはっきりと示している。息子や義理の息子の新所帯の創設は、両親の富が減少する重大な局面であった (Rüthing, 1986, p. 433)。ライフコースにわたる財産の変化は、人生の階段のカーブとぴたりと平行線をなしているのである。

都市の手工業者における世代間の関係と財産の移転の研究は、やっと始まったばかりである。これまでわれわれが手にしている唯一の証拠は、親方手工業者に雇われた奉公人の数を、親方の年齢集団別に示したものである。この数は、ライフコースにわたって変化する経済活動の指標になる。

チェルッティによる 1705 年のトリノのセンサスの分析によれば、なんらかの奉公人を雇っている親方の数と、親方に雇われた使用人の工房あたりの数は、両者とも、親方の年齢が 40～49 歳のときに頂点に達した。「徒弟と職人の数は親方が分別盛りの年齢の世帯でより多かったが、40～50 歳の範囲にある世帯で特に多かった」 (Cerutti, 1991, pp. 114f)。19 世紀のウィーンでは、手工業者の工房に雇われる労働力は 40 歳まで増加し、奉公人と子どもたち — かれらはときには父親の手助けをした — の数は 40～50 歳でピークに達した。55 歳を過ぎると、正式の奉公人 (徒弟、職人、女中) と潜在的な使用人 (息子や娘たち) は、ともに急激に少なくなった (Ehmer, 1980, p. 55)。1840 年頃のドイツの絹織物都市クレフェルト (Krefeld) でも似たようなカーブが観察される。ここでは、親方手工業者の経済力は 37～46 歳にそのピークを迎えた (Kriedte, 1991, p. 166)。

勿論、これらすべての事例は、断片的でばらばらな証拠を提供してくれるにすぎない。しかしながら、これらはすべて同じ方向を指している。16～19 世紀中欧のさまざまな社会環境において、人々は、人生の階段の理想的なイメージからあまりかけ離れていなかったライフコースを経験したように思われる。

### 結び (Conclusions)

最後の数節では、いくつかの社会環境で見られる、ライフコースと世代間の関係と老年との結びつきの事例を紹介した。抽象的な観点からみれば、これらの環境はすべてある社会経済的特徴を共有している。すなわち、これらの社会環境では、家族ないし世帯が最も重要な生産単位であり、それら（もっと正確には、その成員のある者つまり世帯主）が生産手段の所有者であり、かれらはその財産を家族内で相続によって移転したのである。こうした社会的構成物を特徴づけるのに、歴史家たちは異なった用語を用いている——「農民的生産様式 (peasant mode of produce)」、「家族的生産様式 (familial mode of production)」、あるいは「小商品生産」。

この論文の中心的議論は、小商品生産という特定の社会的構造物と、人生の階段の画像に表現されたライフサイクルと老年の概念とのあいだには関係がある、という仮定に立っている。この画像は、ライフコースの設計図を提示して、この特殊な生産様式内での世代間の関係を規制するのに適していた。さらに、人生の階段の画像の人気の普及と持続と衰退は、小商品生産の歴史的な発展と関係していたように思われる。

中欧では、農民家族の農家と親方手工業者の工房が社会構造に及ぼす影響力は、16 世紀から 19 世紀にかけて増大したように思われる。農民層は、その所有権を徐々に強くして、ついには自らを解放した。こうした法的地位の向上だけでなく、農民は事実上の相続権と処分権を行使した。財産移転の形態とメカニズムに関するわれわれの知識は、非常に限られたものである。しかし、資源を支配し配分する基本的な枠組としての家族が、土地市場によって弱体化された、とさえねばならない証拠はなにもない。財産相続と、もっと一般的には、家族や親族の取引は、むしろこの時期に重要性を増した。似たような傾向は、都市の親方手工業者においても見られる。同職組合を閉鎖的にして親方の数を制限しようとするかれらの試みは、親方の息子や義理の息子に特権を与え、社会的再生産の過程における家族の役割を強化した<sup>90</sup>。

さらに、同じ時期に、社会的階層分化が急速に進んだ。1500 年頃の中欧の農村社会では、人口の大多数が農民であったが、1800 年頃には本来の農民は少数派になってしまっていた。同じことは、都市の手工業者と商人にも起こった。ある階級の一員として生まれたからといって、もはや自

動的に生涯にわたってその階級の一員であり続けるられるわけではなかった。財産のある農民の子どもたちは、社会的地位が下がる可能性に気づかねばならなかった。相続財産は社会的・経済的地位を保証するうえでますます重要になった。結婚年齢と未婚率の長期的な上昇は、こうした問題の数量的な表現である。この現象は、中欧のさまざまな地域で 17 世紀に始まり、19 世紀半ばにそのピークに達した (Ehmer, 1991)。

19 世紀末までは、賃労働はまだ大多数の人々の全生涯を規定するものになっていなかった。むしろ、賃労働はライフサイクルの初期の段階に限られていた。大抵の人々は、30 歳頃を出発点として、自立した農民や手工業者や商人になろうと努めた。例えば、19 世紀末ドイツの統計 (1882 年、1895 年、1907 年) によれば、労働者の割合は年齢が高くなるにつれて低下していき、40～49 歳で独立自営業者の割合が労働者のそれと等しくなり、50 歳をこえると前者が後者を数的にかなり凌駕した (Ehmer, 1988)。多くの場合、こうした独立自営業者は生存限界ぎりぎりの独立状態にあったが、かれらは小商品生産の社会的・精神的な伝統——なかでも資源と財産権の移転のパターン——を維持し続けた。

要約すると、私の見方では、人生の階段の単純な図像は、近世から 19 世紀末まで中欧で優勢であったこの特殊な「家族的生産様式」内での世代間の関係の「理念的」イメージのようなものであった。相続と経済的独立と結婚の結びつきがその一般的妥当性を失ったのは、19 世紀から 20 世紀への転換期の頃である。社会的な上昇・下降移動と社会的地位は、ますます労働市場と教育制度に依存するものになった。社会保障は、ますます家族以外の諸制度によって提供されるようになった。こうした変化によって創りだされた社会的・精神的環境においては、ライフコースを設計し、世代間の関係を規制するのに、人生の階段の画像はもはや必要がなくなっていた。現にそのとき、人生の階段の長期にわたる人気はその終焉を迎えたのである。



## (注)

次の方々に特に感謝したい。Gerd Göckenjan には未発表の知見を共有させてくれてことにたいして、Hermann Rebel には有益な議論とコメントにたいして、また同氏と Barry McLoughlin には翻訳を援助してくれたことにたいして。

- (1) 人生の階段の図像と、このモチーフの意味と普及に関する論文とを収録した最も重要な文献は、“Lebenstreppe”である。
- (2) 各年齢に対応する動物のシンボルには若干の違いが見られる (Zacher, 1981, p. 403ff; Gabelentz, 1939 を参照、また図 1 をも参照)。アナベルク (Annaberg) の聖アネン教会 (St. Annen-Kirche) の浅浮き彫りには、以下のような対応関係が示されている。

年齢 (anni)	男 (men)	女 (women)
10 歳 (X)	子牛 (Kalb / calf)	ウズラ (Wachtel / quail)
20 歳 (XX)	雄山羊 (Bock / he-goat)	鳩 (Taube / dove)
30 歳 (XXX)	雄羊 (Widder / ram)	カササギ (Elster / magpie)
40 歳 (XL)	ライオン (Lowe / lion)	クジャク (Pfau / peacock)
50 歳 (L)	狐 (Fuchs / fox)	雌鳥 (Henne / hen)
60 歳 (LX)	狼 (Wolf / wolf)	ガチョウ (Gans / goose)
70 歳 (LXX)	犬 (Hund / dog)	ハゲタカ (Geier / vulture)
80 歳 (LXXX)	雄猫 (Kater / cat)	アヒル (Ente / duck)
90 歳 (LC)	ロバ (Esel / donkey)	コウモリ (Fledermaus / bat)
100 歳 (C)	大鎌をもった骸骨の死神 (Sensemann / skeleton armed with scythe)	

- (3) このバージョンのドイツ語テキストはブランデンブルク (1612 年) の葬儀の式辞に由来し (Imhof, 1984, p. 144)、以下のとおりである。

“Zehen Jahr ein Kind,  
 Zwanzig Jahr ein Jungeling,  
 Dreissig Jahr ein Mann,  
 Vierzig Jahr wohlgetan,  
 Funffzig Jahr stille stahn,  
 Sechszig Jahr gehet das Alter an,  
 Siebenzig Jahr eon alter Greiß,  
 Achtzig Jahr nimmer weiß,  
 Neunzig Jahr der Kinder Spott,  
 Hundert Jahr Gnad dir Gott.”

John Winter Jones (1853, p. 178) は、以下のように英訳している。彼が選んだこの格言のバージョン

は普通のものとは違っており、40 歳と 50 歳の属性が逆になっている。

“For the first ten years a child.

At twenty years a youth.

At thirty years a man.

At forty years stationary.

At fifty years well to do.

At sixty years on the decline.

At seventy years look after thy soul.

At eighty years the fool of the world.

At ninety years the laughing-stock of children.

At hundred years, now God have mercy on thee.”

Zacher (1891, p. 390 以下) は、この格言の 16 世紀ドイツの種々のバージョンを比較している。

- (4) Chew (1962, p. 149) には、トマス・パンクロフトの「人の段階的変化」(1639 年) が引用されている。

“We climb the slippery stairs of Infancy,

Of Childhood, Youth, of middle age, and then

Decline, grow old, decrepit, bed-ridden,

Bending to infant-weakness once again,

And to our Cophines (as to Cradles) goe,

That at the at-aire-foot stand, and stint our woe.”

- (5) Schapiro, 1940, p. 167。18 世紀の種々の事例では、最後の審判は人生の階段にその居場所をもっていた (Duchartre & Saulneir, 1925, p. 103 を参照)。
- (6) Lise, 1977, pp. 11, 13, 60f.; Toschi, 1969, p. 125; Dumont, 1965, pp. 60ff.; Mistler, 1961, pp. 46ff.; Schenda, n.d., p. 19; Lebensstreppe, n.d., pp. 125. 131 を参照。
- (7) Library of Congress, prints and photographs reading room, Map 4443 F - Religious and inspirational - steps of life and death を参照。
- (8) 種々の「老年の歴史」(Histories of Old Age) の諸章を見よ。例えば、  
Fischer, 1978:  
Gerontocratia (1607-1820) ; Gerontophobia (1770-1970).  
Borscheid, 1987:  
Im Tal der Verachtung; Alter als Fluch (1350-1648/80); Auf der Hohe des Ansehens; Alter als Autorität (1648-1800/20) .  
Bois, 1989:  
Le Temps des Riguers (1580-1700); Le Temps des Faveur (1700-1780) ; Le Temps des Fureurs (1780-1839) .  
19 および 20 世紀については、特にアメリカの研究者、例えば、Achenbaum, 1978; Haber, 1983 を見よ。

- (9) 私にこうした解釈への刺激を最初に与えてくれたのは Gerd Göckenjan である (Göckenjan, 1989 を参照)。
- (10) こうした試みは、プロト工業化された農村の手工業者たちのあいだでさえも見られた。19 世紀ザクセンのリボン織工たちの隠居については、Schöne (1977) を参照。
- (11) 土地市場と家族と相続との関係は、中世末期に関して、イギリスの歴史家たちによって議論されてきた。この議論を 18 および 19 世紀の中欧へとシフトさせた研究として、Sabeau (1990, pp. 410ff) を参照。都市の親方手工業者たちの家族戦略 (family strategies) については、Cerutti (1991) を参照。

### 参考文献

- Achenbaum, W. A. (1978). Old Age in the New Land. The American Experience Since 1790. Baltimore: The Johns Hopkins University Press.
- Adhemar, J. (1968). Populäre Druckgraphik Europas: Frankreich vom 15. zum 20. Jahrhundert. München: Callwey.
- Ariès, P. (1978). Geschichte der Kindheit (Centuries of Childhood). München: Deutscher Taschenbuch Verlag.
- Beauvoir, S. d. (1977). Das Alter (Old Age). Reinbeck: Rowohlt.
- Bialostocki, J. (1957). Europäische Malerei in Polnischen Sammlungen 1300-1800. Warschau: PIW.
- Bilderfabrik. (1973). Die Bilderfabrik. Dokumentation zur Kunst- und Sozialgeschichte der industriellen Wandschmuckherstellung zwischen 1845 und 1973 am Beispiel eines Großunternehmers, Historisches Museum (Ed.). Frankfurt/M.: Franz Jos. Heinrich K.G.
- Bois, J.-P. (1989). Les Vieux de Montaigne aux premières retraites. Paris: Fayard.
- Boll, F. (1913). Die Lebensalter: Ein Beitrag zur antiken Ethologie und zur Geschichte der Zahlen. Neue Jahrbücher für das klassische Altertum, 16, 89-137.
- Borscheid, P. (1987). Geschichte des Alters. 16.-18. Jahrhundert. Münster: F. Coppenrath.
- Braudel, F. (1958). Histoire et science sociales. La longue durée. Annales ESC, 13, 725-753.
- Brückner, W. (1969). Populäre Druckgraphik Europas: Deutschland vom 15. bis zum 20. Jahrhundert. München: Callwey.
- Burrow, J. A. (1986). The Ages of Man: A Study in Medieval Writing and Thought. New

- York: Oxford University Press.
- Cerutti, S. (1991). Group strategies and trade strategies: The Turin Tailors' Guild in the late 17th and early 18th centuries. In St. Woolf (Ed.), *Domestic Strategies: Work and Family in France and Italy, 1600-1800* (pp. 102-146). Cambridge: Cambridge University Press.
- Chew, S. C. (1948). This strange eventful history. In J. G. Manaway, et al. (Eds.), *Joseph Quincy Adams Memorial Studies*, (pp. 157-182). Washington: The Folger Shakespeare Library.
- . (1962). *The Pilgrimage of Life*. New Haven: Yale University Press.
- Cole, T. R. & Winkler, M. G. (1988). "Unsere Tage zählen": Ein historischer Überblick über Konzepte des Alterns in der westlichen Kultur. In G. Göckenjan & H.-J. v. Kondratowitz (Eds.), *Alter und Alltag* (pp. 35-66). Frankfurt am Main: Suhrkamp.
- Dal, E. (1980). *The Ages of Man and the Months of the Year: Poetry, Prose and Pictures Outlining the Douzemois Figures Motif Mainly Found in Shepherds' Calendars and in Livres d'Heures (14th to 17th Century)*. Kobenhavn: Koneglige Danske videnskabernes selskab: Kommissioner, Munksgaard.
- Duchartre, P. L. & Saulnier, R. (1925). *L'imagerie populaire*. Paris: Librairie de France.
- Dumont, J. M. (1965). *Les Maitres Graveurs Populaires 1800-1850*. Épinal: L'imagerie Pellerin.
- Ehmer, J. (1980). *Familienstruktur und Arbeitsorganization im frühindustriellen Wien*. Wien: Verlag für Geschichte und Politik.
- . (1982). Zur Stellung alter Menschen in Haushalt und Familie: Thesen auf der Grundlage von quantitativen Quellen aus europäischen Städten seit dem 17. Jahrhundert. In H. Konrad (Ed.), *Der alte Mensch in der Geschichte* (pp. 62-106). Wien: Verlag für Gesellschaftskritik.
- . (1988). Lohnarbeit und Lebenszyklus im Kaiserreich. *Geschichte und Gesellschaft*, 14. 417-447.
- . (1990). *Sozialgeschichte des Alters*. Frankfurt/M: Suhrkamp.
- . (1991). *Heiratsverhalten, Sozialstruktur, ökonomischer Wandel: England und Mitteleuropa in der Formationsperiode des Kapitalismus*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
- Fehrmann, C. (1952). *Diktaren och Döden: Dödsbild och förgängelsetanke i litteraturen*

- fran antiken till 1700-talet. Stockholm: Boninier.
- Fischer, D. H. (1978). *Growing Old in America*. Oxford: Oxford University Press.
- Friedrichs, C. R. (1979). *Urban Society in an Age of War: Nördlingen 1580-1720*. Princeton: Princeton University Press.
- Gabelentz, H. v. (1939). *Die Lebensalter und Das Menschliche Leben in Tiergestalt*. Eisenach-Berlin: Steininger.
- Gaunt, D. (1983). The property and kin relationship of retired farmers in northern and central Europe. In R. Wall (Ed.), *Family Forms in Historic Europe* (pp. 249-279). Cambridge: Cambridge University Press.
- Göckenjan, G. (1989). Altersbilder als Konzepte sozialer Praxis in deutschen Zeitschriften des 18. und 19. Jahrhunderts. Arc-et-Senan: 3rd Table Ronde Franco-Allemande de'Histoire Sociale, unpublished conference paper.
- Grimm, J. (1863). Rede auf Wilhelm Grimm und Rede über das Alter. Berlin: Dümmler.
- Grüll, G. (1969). *Der Bauer im Lande ob der Enns am Ausgang des 16. Jahrhunderts*. Wien: Bohlau.
- Haber, C. (1983). *Beyond Sixty-Five: The Dilemma of Old Age in America's Past*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Halliwell, J. O. (Ed.). (1856). *The Works of William Shakespeare*, vol. VI. London: Adlard.
- Hareven, T. K. (1982). The Life Course and Aging in Historical Perspective. In T. K. Hareven and K. Adams (Eds.), *Aging and Life Course Transitions: An Interdisciplinary Perspective* (pp. 1-26). London, New York: Tavistock Publications.
- Heinisch, S. (1991). Kulturgeschichte des Alterns. In *Der Kuß des Alters: Eine interdisziplinäre Untersuchung über das Altern von Menschen und Dingen*, Bundesministerium für Wissenschaft und Forschung (pp. 7-25). Wien: unpublished manuscript.
- Held, T. (1982). Rural retirement arrangements in 17th- to 19th-century Austria: A cross-community analysis. *Journal of Family History*, 7, 227-254.
- Imhof, A. E. (1984). *Die verlorenen Welten*. München: C. H. Beck.
- . (1991). *Ars moriendi: Die Kunst des Sterbens einst und heute*. Wien: Böhlau.
- Joerißen, P. (n.d.a.). *Lebenstreppe und Lebensalterspiel im 16. Jahrhundert*. In *Die Lebenstreppe. Bilder der menschlichen Lebensalter*. Schriften des Rheinischen Museumamtes, 23 (pp. 25-38). Köln: Druck- und Verlagshaus Wienand.

- . (n.d.b.). Die Lebensalter der Menschen – Bildprogramm und Bildform im Jahrhundert der Reformation. In Die Lebenstreppe. Bilder der menschlichen Lebensalter. Schriften des Rheinischen Museumamtes, 23 (pp. 39-60). Köln: Druck- und Verlagshaus Wienand.
- Johansen, H. C. (1987). Growing old in an urban environment. *Continuity and Change*, 2, 297-306.
- Kieniewicz, S. (1969). The Emancipation of the Polish peasantry. Chicago: University of Chicago Press.
- Krabicka, E. (1980). Übergabemuster ländlicher Hausgemeinschaften am Beispiel der Pfarre Andrichsfurt, 1813-1873. Wien: University of Wien, unpublished M.A. thesis.
- Kriedte, P. (1991). Eine Stadt am seidenen Faden: Haushalt, Hausindustrie und soziale Bewegung in Krefeld in der Mitte des 19. Jahrhunderts. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
- Laslett, P. (1989). A Fresh Map of Life: The Emergence of the Third Age. London: Weidenfled and Nicolson.
- Lebenstreppe (n.d.). Die Lebenstreppe. Bilder der menschlichen Lebensalter. Schriften des Rheinischen Museumamtes, 23. Köln: Druck- und Verlagshaus Wienand.
- Lise, G. (1977). Stampe popolari Lombarde dell'800 Catalogo. Milano: Commune di Milano.
- Marle, R. v. (1971). Iconographie de l'Art Profane au Moyen-Age et à la Renaissance. New York: Hacker Art Books.
- Minois, G. (1987). Histoire der la Vieillesse en Occident de l'Antiquité à la Renaissance. Paris: Fayard.
- Mistler, J. (1961). Epinal l'imagerie Populaire. Paris: Hachette.
- Moody, H. R. (1986). The meaning of life and the meaning of old age. In T. R. Cole & S. A. Gadow (Eds.), What Does It Mean to Grow Old? Reflections from the Humanities (pp. 9-40). Durham: Duke University Press.
- Rebel, H. (1978). Peasant stem families in early modern Austria: Life plans, status tactics, and the grid of inheritance. *Social Science History*, 2, 255-291.
- . (1983). Peasant Classes: The Bureaucratization of Property and Family Relations under Early Habsburg Absolutism, 1511-1636. Princeton: Princeton University Press.
- Rosenmayr, L. (1978). Die menschlichen Lebensalter in Deutungsversuchen der euro-

- päischen Kulturgeschichte. In L. Rosenmayr (Ed.), *Die menschlichen Lebensalter*. München: Piper.
- . (1979). *Lebenszeit und Endzeit: Versuche einer Gegenüberstellung von antiken und christlichen Deutungsversuchen des Lebenslaufs*. In K. Salamun (Ed.), *Sozialphilosophie als Aufklärung: Festschrift für Ernst Topitsch* (pp. 275-296). Tübingen: Mohr.
- Rüdolph, R. L. (1986). *The East European peasant household and the beginnings of industry: East Galicia, 1786-1914. Working papers of the Social History Workshop 86-12. Department of History, University of Minnesota*.
- Rüthing, H. (1986). *Höxter um 1500: Analyse einer Stadtgesellschaft*. Paderborn: Bonifatius.
- Sabean, D. W. (1990). *Property, Production and Family in Neckarhausen, 1700-1870*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schapiro, M. (1940). *Courbet and popular imagery*. *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes*, IV, 1-2, 164-177.
- Schenda, R. (n.d.). *Die Alterstreppe: Geschichte einer Popularisierung*. In *Die Lebenstreppe. Bilder der menschlichen Lebensalter. Schriften des Rheinischen Museumamtes*, 23 (pp. 11-24). Köln: Druck- und Verlagshaus Wienand.
- Schöne, B. (1977). *Kultur und Lebensweise der Lausitzer Bandwerke (1750-1850)*. Berlin: Akademie-Verlag.
- Schraut, S. (1989). *Sozialer Wandel im Industrialisierungsprozeß: Esslingen 1800-1870*. Sigmaringen: Jan Thorbecke.
- Sears, E. (1990). *The Ages of Man: Medieval Interpretations of the Life Cycle*. Princeton: Princeton University Press.
- Sieder, R. & Mitterauer, M. (1983). *The reconstruction of the family life course: Theoretical problems and empirical results*. In R. Wall (Ed.), *Family Forms in Historic Europe* (pp. 309-345). Cambridge: Cambridge University Press.
- Smith, St. R. (1982). *Growing old in an age of transition*. In P. N. Stearns (Ed.), *Old Age in Preindustrial Society* (pp. 191-208). New York: Holmes & Meier.
- Soltow, L. (1990). *The life cycle of ownership in Norway, 1664-1930*. *Journal of European Economic History*, 18, 443-446.
- Taeger, A. (1990). *Der Kampf um den Status des Alters im agrarischen Bereich und die*

vielen Bedeutungen des Altenteils. In G. Göckenjan (Ed.), *Recht auf ein gesichertes Alter? Studien zur Geschichte der Alterssicherung in der Frühzeit der Sozialpolitik* (pp. 35-62). Augsburg: Maro.

Thomas, K. (1976). Age and authority in early modern England. London: *Proceedings of the British Academy*, 62.

Toschi, P. (1969). *Populäre Druckgraphik Europas: Italien vom 15. zum 20. Jahrhundert*. München: Callwey.

Winter, Jones, J. (1853). Observations on the origin of the division of man's life into stages. *Archaeologia*, 35, 167-189.

Zacher, J. (1891). Die zehn Altersstufen des Menschen. *Zeitschrift für Deutsche Philologie*, 23, 385-413.





図1： Jörg Breu d.J., Die neun Lebensalter des Mannes (男の9年齢段階)、アウクスブルク、1540年、Germanisches Nationalmuseum Nürnberg (出典：Lebenstreppe, n.d., p. 26)



図2： Der Neunzigjährige (90歳の老人)、Sgraffitto, Retz, Hauptplatz 15, 1570年 (出典：Lebenstreppe, n.d., p. 46)





図3： Die zehn Stufenalter des Lebens（人生の10年段階階）、アウクスブルク、1660年頃（出典：Brückner, 1969, p. 81）



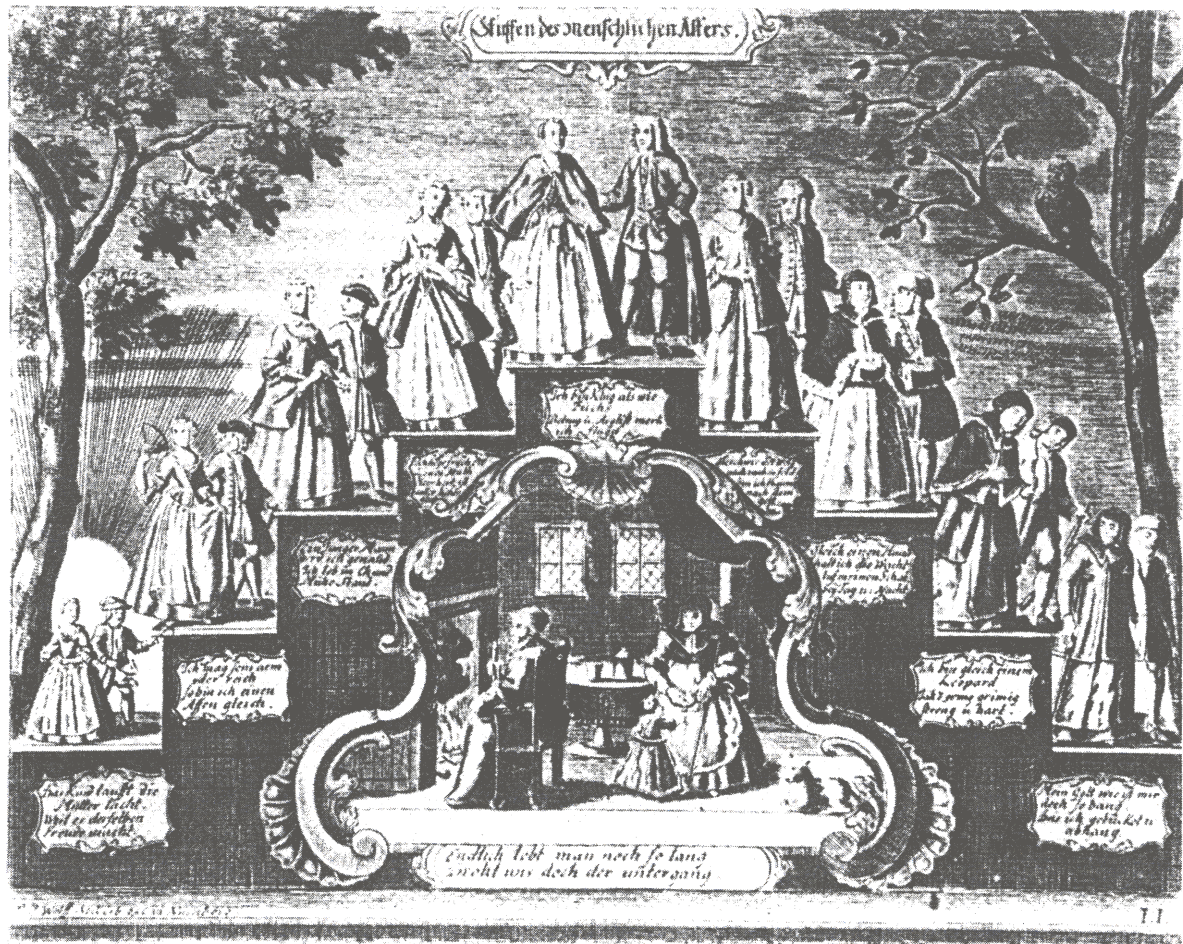


図 4 : Stufen des menschlichen Lebens (人生の諸段階)、ニュルンベルク、18 世紀後半 (出典 : Lebenstreppe, n.d., p. 124)